

第10章 出版

本は脳を育てる

本を読む。「脳のために本は必要」と東大教授・酒井邦嘉は言う。「活字は視覚的な刺激として、脳の視覚野に入ります。脳内で音声化され、記憶と照合して単語や文法要素が検索され、さらに言語野に送られて読む事になります」。「脳内で音声化され」というのが重要です。

「活字を読む時には、音声を聞いたり映像を見たりする時と比べて、書いた人が何を言おうとしているかを想像力で補っています。それによって脳が創られます。さらに、理解するだけでなく思想を形成し、自分の考えをまとめていくことが、脳を創るといふことなのです」。本を読むで「自分の考えをまとめる」のです。だから本を読む事は大切なのです。

夫は、「一行でも自分の勉強に役立つ文がある本は買う」ので、家は本であふれ、庭に第一図書館、第二図書館、実験棟パパハウスを建てた。

私も、童謡や唱歌の研究論文を書くようになると「資料は大事。一つでも資料がないと論文が

仕上がらない」と言つては本を買うようになった。資料が大切ということ、インターネット検索「池田小百合なつとく童謡・唱歌」（事典）の『雪の降るまちを』や『どじょっこ』ふなっこ』であきらかです。

二人の文系の娘たちも本を買う。家の中は、ますます本が溢れ、押し入れからは布団や座布団が撤去され、廊下にも本が積んである。

ある日、郵便局で待っていると、ダスキンの宣伝の女性に声をかけられた。「掃除ですか？掃除はしません。掃除つて、最後にしたのはいつかな？本で床が見えないから、床の掃除ができません。だから掃除はしません」。ダスキンのレディーさんは「ウソだろう」という、きついやな顔をした。

作家・劇作家の井上ひさしは、昭和九年（一九三四年）十一月十七日、山形県東置賜郡川西町（旧・小松町）で生まれました。自分で書くために必要な本を集めて、読んだ。本が家中にあふれて、ついに故郷に寄贈した。「遅筆堂文庫」は、昭和六十二年（一九八七年）、寄贈された蔵書七万冊をもとに開設された。「遅筆堂」とは「遅筆でも良い作品を書きたい」という井上ひさしの号で、それをそのまま、文庫の名称に冠している。

平成六年（一九九四年）には、遅筆堂文庫を核に、劇場と川西町立図書館を併設した複合文化施設「川西町フレンドリープラザ」が完成。開設以降も寄贈は続き、資料二十二万点（二〇一〇年現在）を収蔵している。一人の作家が作品を生み出すために集めた資料、蔵書を一堂に会する珍しい文庫として注目を集めている。

井上ひさしは、「むずかしいことをやさしく やさしいことをふかく ふかいことをおもしろく」をモットーにして書き続け、平成二十二年（二〇一〇年）四月九日に亡くなりました。私は、この言葉を座右の銘にして童謡の会をしている。

故郷に本を寄贈した理由は、他にもあるように思う。ある時、NHKテレビの『ようこそ先輩』の番組で、川西町の子どもたちに国語の授業をした。子どもたちは井上先生の質問に対して、なかなか答えなかった。言葉が出なかった。井上先生は、授業が成立しないので非常に困った。テレビに映っている事もあるが、自分の意見をまとめて発言する力が無いと感じた。つまり、本を読んでいないから思考力が発達していないと思った。「遅筆堂文庫」の本を読んで立派な人が育つといいです。期待したい。一言付け加えると、井上ひさしは物書きで教育者ではなかった。子どもたちに発言させるには、それなりのテクニクが必要です。

歌の本『読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞』について

これまでの童謡や唱歌を歌う会では、一般にリクエストに応じて二時間、次々と二十曲も三十曲も歌うのが普通だった。たくさん歌うのが会の自慢だった。時折、指導者が曲の解説をする会は、特別に人気があり多くの人が集まった。

そもそも、童謡や唱歌は一曲歌っても、一分から三分しかかからない。歌詞は、二番か三番しかない。短いから、簡単に暗唱できる利点がある。この短い童謡や唱歌をもとに、二時間の会を

やるのには、工夫が求められる。別紙資料として、曲の解説、作詞・作曲者の事を書いたり、新聞の記事を掲載して話題にしたり、紙芝居や手品、腹話術やフラダンスのゲストを呼んだり、あの手この手で持ちこたえた。二時間は長い。

平成十三年（二〇〇一年）のある日、齋藤孝著『声にして読みたい日本語』（草思社）を手にした。この本は、百五十万部を超えるベストセラーとなった本です。付属のCDを聴いているうちに、ハタとひらめいた。「そうだ、童謡や唱歌を歌う前に歌詞を読んで、それから歌うようにしよう」と。そして、翌月から実行した。「これから歌う歌詞を、はつきりと読んでください。声に出して読むという事は、脳に刺激が行ってとてもいいそうです。健康のためにやってみましょう」。みんなで歌詞を読んでから歌った。好評だった。そのあと、私が歌い方や作詞・作曲者の解説をして、もう一度歌う。あれから十年以上の歳月が流れた。私の童謡の会は、ずっと歌詞を読んでから歌っている。たとえば『ふじの山』や『紅葉』などは、声に出して歌詞を読むと、歌詞の意味が納得できます。

歌詞を読むことは、特に高齢者に好評です。家で歌詞を書いて覚え、暗唱している人も多い。熱心な童謡の会員です。

この事を夫に話すと、「僕は小学校から帰ると、母親の前で国語の本を読んで聞かせた。それで国語の内容を全部覚えた」「中学のときには当時流行ったソニーのテープレコーダーを買ってもらって、朗読を吹き込んで遊んだりした。声に出して読む事は、とてもいいのです」と、得意そうに言った。

私も、ソニーのテープレコーダーを買ってもらい、聴音の練習に活用した。テープに自分でピアノを弾いたメロディーを吹き込み、それを再生して譜面に書き取る練習を繰り返した。昔は、聴音が重視され、音楽大学の受験には必ずあった。今は、学校の音楽教育から聴音がなくなり、譜面を書く指導はほとんど行われていない。聴音は、作曲にも通じ、音を譜面に書きあらわす練習は大切な事なのだが。それより、今は耳から覚える音楽です。

嫁に行った娘の部屋にテープが落ちていた。聴いてみると小学生の時の娘の声聴こえて来た。「トラひげ現る、ヨソロー」という『ひよっこりひょうたん島』の朗読が入っていた。腹を抱えて笑い転げた。

みなさんからの歌の本の感想

○「この本は、すばらしい宝物のような本です。懐かしい歌、忘れかけていた歌に出会え、また、目で見ると歌詞の力強さに感動し、これまで知らなかった色々な事を教えてもらえ感謝しています。ずっと傍に置きます」。

○「金時山に登ったら、この本をいただきました。あいうえお順に曲名が並んでいて便利です。ほとんどの歌を知っている事に驚きました。しかし、只今は歌を忘れたカナリヤのごとく、歌を口ずさむ事から離れています。解説もついでいて、歌を一層理解するのに役立ちます。孫たちと共に歌って楽しむことができるように、本を活用させていただきます」。

○「神崎ゆう子さん司会のFMラジオ『伝えたい歌 残したい歌』が終わってしまいました、

池田小百合さんの本から歌のいわれやエピソードなどが紹介されました」。

○「朝夕、犬を連れて散歩をしています。口ずさむのは童謡です。途中で歌詞が出なくなると、帰宅後、歌の本を開いて確認しています。孫は、大学生で児童心理学の勉強をしています。来春から幼稚園で仕事をする予定です。歌の本は、大いに活用させていただきます」。

○「歌の本は、地域の方々と歌う時の参考にさせていただいています」。

○「月一度のショッピングセンターでの「歌声喫茶」に『読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞』を持参し、みなさんに紹介させていただきました。字が大きくて読みやすい、解説が詳しくて実に良い本だ、というのが感想でした」。

○「童謡の歌詞には、過ぎた時代を懐かしく思える事があります。次の世代にも伝えたいですね」。

○「この歌の本は、非常に勉強になる事ばかりでありがたいです」。

○「歌の本を知人からいただきました。『流れ星』は初めて知った歌ですが、歌詞もメロディーも、優しく、きれいですね」。

○「私たちの唱歌教室では今年から歌集は『読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞』だけにしました。掲載されている『ごはんの歌』は、私の中学時代や子供らの学童保育の合宿で、よく歌いました。最高齢九十二歳の方も元気に歌っておられます。こちらにも元気になります」。

私は、病院や老人介護施設、保育園、幼稚園、地域の公民館に歌の本を寄付しています。みなさんに、喜んで使っていただいています。嬉しい事です。

ある時、老人介護施設に寄付しようと思い持参すると、施設長に「いらぬ」と断られました。私は、がっかりして帰宅し、頭を抱えてしまいました。この施設は、以前、歌のボランティアをした時、同じ部屋で麻雀をしていた四人の老人がいました。この四人は、最後まで歌に参加する事はありませんでした。介護士さんたちも、参加するように声をかける事はありませんでした。老人介護施設は、施設長の方針で外部との接触を嫌う所もあります。内部の事情を見られたいのです。介護士のレベルの問題もあります。ボランティアや歌の本の寄付は、以前のようにできなくなりました。

エッセイ集『歌って暮らせば』について

夫に、「本が完成しました。読んだ感想を言ってください」と言うと、すぐに私が夕飯の支度をしている台所で読んでから「テレビや新聞に『死刑』の記事が出ると、なげムキになるのかわかりました」と言った。「あなたが沢山出て来て、あなたの意見の本になってしまった」と言う。「こんな事、言いましたっけ」「そうでしたか」「覚えていませんね」などと、いつものようにとぼけた。そして、「僕の考え方と違う。僕の考えは、もつと別です。この本は、あなたの考えの本です」「たとえば?」「宗教とか、国旗とかの考え方です。僕は生物学をやっています。人間は、理化学や医学では救えない部分があるのです。国旗についても、あなたの考え方と多少異なります」と、まじめに言った。

夫は新刊を買うと、必ず本にはさんである出版社行きの葉書「愛読者カード」に感想を書いて投稿する。細かい字で、びっしり書いて投函する。私も、葉書を入れて、「感想や注文を書いて投函してください」と、やってみた。この本が、どのように読まれるか期待に胸がふくらんだ。すると、次々感想が寄せられた。そのほとんどは、自分の近況や思い出が書いてあった。

「私の本を読んだ感想なのに、自分の事をみんなが書いて来るわ」と夫に言うと、「それでいいのです。その読み方は正しい」と言った。感想の書かれた葉書や手紙やメールは大切にします。ありがとうございます。

一ヶ月後、「童謡の会での売れ行きはどうですか」と夫が聞いた。「順調よ」「手に取って見たわけでもないのに買うなんて、すごいね。童謡の会で話した事ばかりが書いてあるのに、また買って読んでくれるなんて、ありがたい事ですね」「感謝をしています」。

会員の中には「息子の嫁にもプレゼントします」「娘に渡したいので」「コーラスの指導をしている人にあげようと思います」と言って二冊から十冊も買う人があった。「読んでいる内に死んでしまうかもしれないけれど、先生の本だから買います」「本を読むのは何十年ぶりかしら」と言う人もあった。

『歌って暮らせば』に出て来る人の感想

本に登場する人に配った。会いに行った。

○第7章『悲劇』の「どこで聞く歌か」に書いてある『千の風になって』のパン屋さんは、また、

「あの歌、本当に好きなのよね」と言った。そしてAVXの『にほんのうた』のCDや坂本龍一の話になった。音楽好きなパン屋さんです。

○第2章『日常』の「平凡な日常・八百屋で」の八百屋のおじいさんは、「どれどれ」と言っ受けて取った。お嫁さんが、「そうそう、売る時、いつも『地の物だからね』と言っうんですよ。この通りよ」と言い、お嫁さんの方が嬉しそっうだっった。かわいらしくて素直な人です。円満な家庭のようです。翌日、〈地物 ラッキョウ有ります〉と書いた看板が出た。

○第1章『娘が小さかった頃』の「おばあちゃん」に出て来る写真屋さんは、「へー、『相州 松田町 蕪木写真館』と書いてある。親父もお袋も亡くなっって、僕ももう八十七歳なんですよ」若々しいですね。「いやあ、それほっどでも」。長らく店番は着物姿の上品なオバアサマがやっっておられたのを覚えています。話し方も丁寧で素敵な女性でした。

○第1章『娘が小さかった頃』の「小百合」という名前に出て来る酒屋に持っって行くと、奥さんが出て来て、「あなたは、以前、神奈川新聞に『神奈川の童謡』を連載した人でしょう。ウチで働いていた『やさしいお母さま』の作詞者の稲穂雅巳の事を取材に来た。あれからだよね、童謡や唱歌の歴史だの作者の事が話題になるようになったのは」「そうですね」。ずいぶん古い事を覚えてる賢い人です。「旦那が大学に合格した時、『小百合』という名前の子も合格していて、みんな、どんな人だろうと噂をした事があっったようよ」などと話した。

NHK大河ドラマ『平清盛』の話にもなり、「この辺には源氏や平氏の家臣の姓の家が点在している」「それ知っっていますよ。平氏方は大庭さん、梶原さん、松田さん、河村さん、大友さん、

曾我さん、沼田さん。源氏方は中村さん、土肥さん、土屋さん、二宮さん、小早川さん、それに酒匂さん、真田さん、豊田さん、岡崎さん。真鶴町には青木さんと朝倉さんが多いですね。土肥さんは源頼朝の再起を祝って謡い踊った土肥実平の子孫かも」「秦野の、山の武士団・波多野一族は、石橋山の合戦の時、なぜ動かなかったのでしょね」などと盛り上がった。酒を飲んでいないのに、酒屋の店先で宴会のようなやかましさだった。

○第3章『教育』の「席を譲る」に書いてある「綿の木」をくれた中井町の『童謡を歌う会青い鳥』の会員は、今度は「ジャガイモの実」を持って来た。ジャガイモは花が咲き、当然、そこに一円玉ぐらいの小さな実をつける。地上に実を付けるのを見るのは非常に珍しい。夫が喜んで写真を撮り、インターネット上の自分の生物実験のブログに掲載した。夫のブログで見る事ができます。私たちが、いつも食べているジャガイモは、地下茎がふくらんだ物です。

○第3章『教育』の「光あらたに」を歌うに出て来る「童謡を歌う会真鶴」の会員からは、また「海の幸です」という手紙と一緒に宅配便で干物が送られて来た。娘たちにもわけて、みんなで食べた。

○第4章『行事』で、毎年「年賀状」をいただく中学校の時の国語の先生からは、次のような葉書でのお礼状が届きました。嬉しくて童謡の会で紹介したほどです。

「小百合さん、『歌って暮らせば』読ませていただきました。文章のあちこちから、歌と共に生きていくことの幸せが、溢れ出ていました。」

平成二十四年六月十六日（土曜日）、東京都町田市の町田市民ホールで、高浪先生の町田混声

合唱団の定期演奏会がありました。歌が多くの人々の心を支え、生き甲斐となっていてるか、改めて感じた日でした。詩を書くエネルギーが湧いてきました。小百合さんも、歌と共に、いつそう若々しく、ご活躍ください。お礼まで」。

第3章『教育』に「音楽の先生の余談」として高浪先生が紹介してあります。音楽大学を卒業したばかりの若き教師は授業中にこう言われた。「僕は、天気予報を見ていると、いつも驚きます。『高波（たかなみ）に注意』とか、『高波が襲って来る』とか言うからです。僕は何も悪くありません」と。その時は何ともなかったが、後になって天気予報を見るたびに笑った。先生の名前は、「高浪（たかなみ）」といった。

『喜びの別れ』は昭和四十五年秋にできました。『高校生の音楽2』（音楽之友社・昭和四十八年文部省検定済、昭和五十一年発行）に掲載され日本中で歌われました。国語の菊地勲先生が詩を書き、音楽の高浪晋一先生が作曲をしています。

喜びの別れ

菊地 勲 作詞
高浪 晋一 作曲

心をこめて ♩=80

さようなら　　一　このとき　　一　さようなら　　一　さようなら　　一　さようなら

ひ　　-

さようのひ　こころ　よく　わかれ　ゆく　みちに　　-　あかあかと

みちに

に　の　ひ　は　　み　ち　　-　こ　こ　ろ　も　　ゆ　る　も　　ゆ　る　　-

さ　よ　う　な

ら　　-　このとき　　-　さようなら　　-　さようの　　ひ　　-

さ　よ　う　な　ら　　こ　の　と　き　　さ　よ　う　な　ら　　さ　よ　う　の　ひ　た　の　し

き　と　き　よ　　よ　ろ　こ　　ひ　の　　ひ　　よ

*この曲は、同声二部合唱で歌えます。またテノールのパートを省けば混声三部合唱でも歌えます。

『歌って暮らせば』童謡の会員の感想

○「表紙がピンクなので、明るい気持ちで何度も読ませていただいています。第7章『悲劇』の「それぞれの人生」は、私の教訓のようです」。

○「私は真鶴出身なので、第2章『日常』の「真鶴」の所は、とても嬉しく読ませていただきました。こんなに真鶴を褒めていただくと、涙が出るほどです。感激です。今も、実家に帰ると兄夫婦が美味しい刺身を出してくれます。真鶴って、本当に良い所ですよね」。

○「私も、第5章『医療』にある「白内障」の手術をしました。目を大切にして本を読んでいます。私は、人生の途中から今の町に住むようになったので、近隣の町の事を、ほとんど知りませんでした。本を読むうち、あちこちの町の事を知りました。思わず吹き出してしまったり、なるほどと感心したり、新発見に触れたり、サーッと読んでしまつてはもつたいたないです。ふと思つた事ですが、昔のように、みんなで聴ける童謡や唱歌の番組がほしいと思えました。先生のユーモアあふれる話と、素敵な歌が流れてきたら、どんなに良いか。シニア世代が増える、これから世の中に、元気をもらい、心から温かくなる番組がほしくなりました」。

○「とても読みごたえがありました。後半は特にです。先生は、昔の事を好く覚えていると思えました。私の娘は小さい頃から「ピアノの先生になりたい」と言っていて、現在、東京でピアノの講師をしています。私は今、夫と二人暮らしで、本を読んだり、詩吟の勉強をしたりしています」。

○「小田原で育つた私にとって、なつかしい地名、店名などに思わず笑顔になりました。明るく楽しく、子どもに何でもさせる子育ては、私など反省しきり、見習う事が沢山ある事に気づきま

した。現代の進んだ世の中に生きて行く若い人々には、年配者の意見にも耳をかしてほしい。私たちは、「ためになるなあ」と思ってもらえる生き方を日々続けたいと思います。暑くなる季節、くれぐれも、お体ご自愛下さい」。

○「私の母は、いつも童謡を口ずさんでいました。童謡の会で、みんなで歌っているうち、涙が出る時もあります。先生との出逢いを大切に、歌を歌って残された人生を生きていきたいと思えます。これからも、よろしくお願いいたします」。

○「最初のエッセイ集『満点ママ』を、とても楽しく読みました。続きを読みたいなと思っていたので、『歌って暮らせば』も、うなずいたり、クスツと笑ったりしながら、本当に楽しく読ませていただきました」。

○「一気に読んでしまい、二度目は少しづつかみしめながら読みました。特に子育てについては反省もしながら楽しいひとときを持つ事ができました。感謝しています」。

○「第5章『医療』に書いてある「豚の目玉」の話はおもしろかったです。私は白内障の手術をしました。メガネなしで新聞が読める事は、好かったと思います。先生、「サングラス」はかけてください。次の童謡の会も楽しみにしています」。

○「自分の童謡の会参加二十年を振り返り、懐かしく思い出しながら読みました。音楽祭も楽しい思い出です。『童謡の会は、私の夢と希望です』と結んでありますが、会員として同じ思いです。これからも童謡の会を楽しみに、学びの場にします。よろしく願います」。

○「楽しく読ませていただきました。書くことが苦手な私は、本を出版されただけで尊敬してい

ます。特に第8章『夫婦』を楽しく読みました。自分たち夫婦は、どうだったかと、改めて思い返していました。それなりに沢山の思い出を残して夫は逝ってしまいましたが、その思い出があったので、元気でここまで来る事ができたと思っっています。先生、いつまでもステキな御夫婦でてください。これからも、懐かしい歌、新しい歌を教えてください。楽しみにしています。どうか、お身体ご自愛下さいませ」。

このように、ほとんどの童謡の会員が本を買い、読んで話題にしているのに、本には全く興味を示さない人もあった。

母は若い頃よく本を読んでいた。小学校の教員をしていたので、出会う人に「山崎豊子著『白い巨塔』（昭和四十年 新潮社刊）は、面白いですよ。読まれるといいですよ」などと、好かった本を紹介していた。ところが、ある時、急に本や新聞を読まなくなった。勝手に新聞販売取扱店に行つて新聞の配達を断つて来てしまったので、私が行つて謝り、また配達をお願いした。それは、五十歳の頃の事だった。その後、急速に痴呆が進んで行つた。当時、その事に家族は誰も気がついていなかった。

父は吉川英治著『宮本武蔵』や司馬遼太郎著『竜馬がゆく』などの時代小説を、農作業の後、寝ながら読むのを楽しみにしていた。新聞も毎日読んでいた。八十代前半まで自動車の運転をしていた。父も母も大正四年生まれ。

『歌って暮らせば』一般読者の感想

- 佐賀市在住の人から「第2章『日常』の「まぎらわしい」に佐賀の市民会館と文化会館の事が書いてあり、楽しく読ませていただきました」。
- 「一本筋の通った本です。深い内容で、いろいろ考えさせられました」。
- 「僕は若い頃、妻を交通事故で亡くしました。このような楽しい『夫婦の会話』はありませんでした」。
- 「生活レベルの違いに感想を書くのをためらっています。感想を文章にするのは難しいです」。
- 「第6章『出会い』の部分が最も印象に残りました。多分、私も関心を持っている人々の事だからと思います」。
- 「ご主人の言葉が、いかにも先生らしいですね。第2章の『聞きなし』は、始めて見た言葉です。最近のコミュニケーション不足には対策が必要と思います。いろいろな事を、しっかり記憶・記録されていることに感心しました」。
- 「全編を通じて温かい家族の様子が伝わり、楽しく拝読させていただきました。第7章『悲劇』、私も同感です」。
- 「面白く読ませていただいています。近頃、あまり元気がないので、みんなが心配をしてくれています。何かをするのがおっくうで、怠けています。でも、この本があるので楽しくしています。毎日、少しずつ楽しみに読んでいます」。
- 「第6章『出会い』の「蓑田良子先生」には、大学の時、教えていただいた事もあり、懐かし

かったです」。

○「四十四年前の一九六八年四月十四日、山北駅から御殿場線の蒸気機関車D5272に乗車した思い出があります」。

○「第2章の『演歌』は、とても興味深く読ませていただきました」。

○「奇抜なタイトルが目を引きました。「今どき」の名前の所では、全く同感と思いました。私は以前、町の教育委員をしていましたが、学校の入学式、卒業式に出ると名簿が渡されます。その時、「今どき」の名前が次々出てきます。読めませんし、男の子か、女の子かもわかりませんでした」。

○「随筆は、淡々と綴られていて、童謡のように心地よい響きを心に感じる事ができました。人生の大・小さまざまな出来事が、思想に彩られることなく書かれているのが、心地よく感じるのではないかと思つた事でした。私も、できるだけ『歌つて暮らせば』の生き方ができるようにしたいと思いますが、なかなか難しい事です」。

○第3章『教育』に「音楽の先生の余談」として高浪先生が紹介してあります。

「私も国立音楽大学の卒業生です。高浪さんは、すぐ上の先輩で、男子寮で一緒でした。毎朝起きるとすぐ外に向かって発声練習をする面白い先輩でした。近所の方が何も苦情を言わなかつたです。国立市の住民は、よい人が多かつたからだと思ひます」。

○「楽しく読ませていただきました。お会いした事がないのに、とても懐かしい気持ちになりました。ますます自分が住んでいる松田町、そして隣の大井町も好きになりました」。

○「第7章の『悲劇』の中の「うそ本」は、私の感じ方と一緒にした。いろいろな情報が出回っていますが、本当に必要な物はパーセントもないと思っています。インターネット情報も同じですね」。

○「ピンクの袋を開けると、これまたピンクの装丁の本。今の私は、まさに歌って暮らしている状態なので、読むのが楽しみです。少し拾い読みをしましたが、あちこちで声を立てて笑いました。しばらくは『笑って暮らせば』になるかもしれない。歌の仲間にも読んでもらいます。井上ひさしさんの『星あかり』は、私たちの唱歌教室でも是非歌いたいと思います」。

○「ハラハラ、ドキドキの場面も多くありましたのに、読後感がすつきりして思わず「ああ面白かった」と声に出し、本を閉じました。一つ一つの話が短いのも読みやすい事でした。第8章『夫婦』の突発性難聴の項を読んでビックリしました。人間は、いつ障害を持つ身になるかも知れないのですね。他人事とは思えません。私も月二回、市の唱歌教室に楽しく参加しています。池田さんも、いつまでも歌い続けてください。ご夫婦の健康を祈っています」。

○「同世代の人間として共感できる部分があります。ほとんど言っても良いです。小さい頃、大鵬より柏戸の相撲が好きだったので、池田さんの本に、まさか柏戸の名前が出るとは思ってもいなくて、嬉しくなりました」。

○「私は、父や母の介護を、兄、義姉、姉にまかせきりでした。近くに住んでいなかったことは言い訳にはなりません。ほとんど親孝行もできませんでした」。

○「子育て奮闘記とでもいいえる、お子さんとかかわりの部分は、内容が詳細にわたり、まるで

ビデオ記録でもして、それを再生して見ているかのような感じでした。何か克明に記録でもつけていたのでしょうか。家族のほのぼのとした温かさが伝わる感じで読ませていただいています」。

○「読み始めて三時間、読みふけてしまいました。まだ半分も読み終わっていません。心豊かな著者だなあと思いました。できる事なら、もう一度子育てをし直したいと思いました」。

○「一つ一つのエッセイの最後の一文が面白く、そういうオチにいきますか、と思わず吹き出してしまふ所が何ヶ所もありました。発想が豊かなのですね」。

○「本日は、すばらしい本を頂き、感激。大喜び致しております。早速、拝読させていただきます」。

このように、みんなが出版を祝い、本を読んでもらっている中、「本を送りつけられて迷惑だ。読む時間などないので、図書館に寄付する事にしましたので悪しからず」という葉書が届いた。沈んでいる私に夫が、「その人は、高齢ではないか」と〈魔法の言葉〉をかけてくれた。真つ暗だった心がパツと明るくなった。気分が晴れ晴れとした。〈魔法の言葉〉が立ち直らせてくれた。

第2章『日常』にあるように、安易に「贈物」はできないと改めて思った。

同じ日、別の人から葉書が届いた。「よかつたら読んでください」と言って本をプレゼントした人からの葉書だ。この人には、突然出会ったので葉書を渡していなかったが、長い便りが届いた。「夕飯の後から読み始めました。とにかく楽しくて、楽しくて、一気に読み終わりました。『満点ママ』（夢工房出版）も読んでみたいと思います」と。この高齢の女性は、長らく母親の介護をしていたが、自分が大病をし、息子の世話になるために大井町に帰郷した。苦勞をしてい

る。同じ「贈物」をもらつても、人によりこれだけ違う。

私は、童謡の会員から宗教の本や政党の本をただく事がある。自分で買って読む事は、まずないので、ありがたく読む。この宗教は、このような教え。この政党は、このような活動をしているのかと知る事ができ勉強になります。本をプレゼントしたり、プレゼントされたりすることは、悪い事ではない。むしろ、そのような友人、知人がいることに感謝をしています。

書く

私は文を書くのが好きです。いつも何か書いていたい。書く楽しい。

「作文」を書く

小学生の時、先生がガラツとドアを開けて教室に入つて来られた。そして「今の事を作文用紙に書くように」と言われた。多くの生徒が困つた。書くことがなかった。私も。

翌日、うまく書いた生徒の作文が読み上げられた。彼女の作文には「ドアのガラスに先生の影が映つた」という一文が入っていた。私は「うまいなあ」と感動した。作文の指導については他に覚えていないが、何しろ長く書くと、ほめられた。遠足の作文などは、朝起きたところから、夜寝るまでを延々と書く生徒もあった。作文用紙は、いくら使つてもよかつた。午前中、作文が書き終わらない生徒が多いと、午後も作文の授業になつた。一日中、作文だつた。

図画の授業も同様で、外に出て風景画を描いた。ほとんどの生徒が遊んでしまうので描き終わらず、午後からも図画の授業となった。一日中、図画。先生も、一緒に写生をした。空や道の遠近法や山の影の付け方を教えてもらった。先生が描いた絵を見て、「やつぱり先生はうまいや」と全員が言った。

書道も同じだった。正月は、書初めで書道の時間が多かった。一日中、書道だった。先生のお手本は、すばらしかった。理由があつた。先生は、お坊さんだった。先生の家は、山北町のお寺で、教員をしながら住職も兼ねていた。たまに葬儀があると自習になった。みんなで気分よく騒いだ。隣りのクラスの先生が何度も「静かにしろ」と怒りに来た。宿題というものは無かつた。先生は忙しくて生徒の宿題に目を通す時間がなかつたからだ。

先生は、メガネをかけていた。「子どもの頃、絵を描きながら、目が悪い事に自分で気がついた」と言われたのを覚えている。本のページをめくる時の先生の細い指が忘れられません。当然、朗読もお話もうまかつた。大好きだった先生は、ほっそりとした背の高い、色白で神経質そうな人でした。小学校に行くのが毎日楽しみでした。

「手紙」を書く

ある日、夫がマーチのCDを三枚買って来た。「脳障害のある人にプレゼントするから、何か手紙を書いてください」と言った。この障害のある男性は、ピアノを弾くのも、音楽を聴くのも大好き。家には母親が買い与えたピアノがある。しかし、五十歳を過ぎた今日まで、母親が期待

する「おかあさん」という言葉は一度も出ない。それで、夫はマーチのCDをプレゼントしたいと思っただけ。「何か手紙を書いて」と言われても困った。CDを聴いてから手紙を書いて渡すと、夫は、「こんな事しか書けないのですか、なさけない」と言った。それは、いつもの夫ではなかった。私は真剣に悩んだ。そして、もう一度CDを聴き直して手紙を書き直した。母親宛てに書き直した。

実業之日本社の童謡の本の仕事をした時、編集の人が、「読者を念頭に置いて書いていますか。それが、一番大切な事です」と指導してくれたのを思い出した。それ以来、手紙文は、読む人に語りかけるように書くようにしている。

ところで、マーチに限らず、音楽を文で表現する事は難しい。時々、知人から合唱のCDやピアノの演奏のCD、楽譜集が送られて来る。私は手紙の返事に頭を抱えてしまう。

「奇妙」な手紙

全然面識のない女性から奇妙な手紙が届くことがある。一度や二度ではない。内容は次のようです。

「夫が昨年亡くなりました。遺品を片付け終わりましたが、あなたからの手紙が何通もあります。処分してしまおうかと思ったのですが、失礼は承知で、お尋ねすることにしました。一体、あなたと主人との関係は？」というものです。

私の書いた本を読んで、「質問」したり、「歌詞は全て文語体にすべし」と言って来たり、「略

年譜の年齢が違う」と訂正を求めたりの手紙のやりとりだ。別に、疑われるような関係を持ったわけではない。それで、私が童謡の会を主宰している事、夫と、娘が二人いる事などを書いて送る。返事は無いのが普通だ。時間をかけて手紙を書いたのに。了解したとの返事の一つもあっていいのではないかと思う。

私の家では、夫に女性から手紙がいくらでも来る。教え子、職場の同僚、同級生、蜘蛛学会の人、仕事の関係の編集者やプロデューサーなど。誰が何のためになど考えていられないほどの分量で毎日手紙が届く。時にはファンレターのようなカワイイ手紙もある。

他の家庭では、夫に女性から手紙が来る事は無いのだろうか。内容を読めば童謡や唱歌の研究のやりとりだとすぐにわかるはずなのに、奥さんは読んでも理解できないのだろうか。

今年の夏休みも、インターネット検索「池田小百合なっとく童謡・唱歌」を全部読んだ人から大量のメールがあった。句読点の欠落、誤植の指摘、略年譜の訂正。いろいろ教えていただき、ありがたいことでした。お礼に『歌って暮らせば』の本と山形の煎餅を送った。すると「旦那さんの故郷・山形の煎餅を受け取りました。家内と一緒に美味しくいただいています。本（『歌って暮らせば』）の感想文は、小学校の時以来苦手です」という返事のメールがあった。私は、本と煎餅を送って好かったと思った。きつと、私の事が奥さんとの間で話題になっていることでしょう。夫婦の会話は最も大切なことです。

「池田小百合」への手紙

新刊『歌って暮らせば』を読んだ人から沢山の感想をいただいた。この本には「名前」のコーナーがあり、「小百合」という名前について書いてある。ところが、私宛の手紙や葉書に「小池百合子様」「小池小百合様」「池田百合子様」と書いてある。童謡の会の会員からも。私に会ったことがある人は、あまりの小ささに驚き、つい「小」を重ねて「小池小百合」と書いてしまうのだから、会った事のない人も間違える。会ったことがない童謡歌手の河村順子さんも間違えた。夫が、「なぜ、こうなるのかな。よく、こんなメチャクチャな名前でも配達されるね」と言った。童謡の会の会場で、面と向かって平気で「小池先生ですか」と言われると驚きのあまり「はい」と返事をしてしまいます。私の名前は「池田小百合」です。

住所も「金手」と「金子」と間違えていても配達されます。先日などは、「足柄上郡大井町」だけで、番地がなくても配達された。「足柄上郡金田村金手」というのも配達された。間違いが、あまり多いので郵便局の職員も、なれたものです。郵便物は毎日たくさん来る。配達のない日はありません。住所と名前は間違えないで書いてほしいものです。郵便局の人に迷惑がかからないように、お願いします。

この話を童謡の会でした。会員から来た残暑お見舞いの葉書に「小池小百合先生」となっていたからだ。ところが、その間違いを書いた会員も「夫が」という話しの所で、他の人と同じに笑った。「私は、女優の吉永小百合と間違えられたことは一度もないです」と言うと、さらに爆笑となった。

「橋幸夫」からの手紙

橋幸夫のヒット曲といえは、「いつでも夢を」です。当時、私は小学生だった。この歌を歌った若き日の橋幸夫が大好きだった。クラスに、私より熱狂的に好きだった子がいて、ファンレターを書いていた。休み時間になると、白い便箋に何度も何度も書き直していた。

しばらくして、私に「橋幸夫から返事をもらった」と、二通の手紙を見せた。私は、「へー、あの橋幸夫からの手紙だなんて、すごいね。いいな」と言って見せてもらった。しかし、彼女は今にも泣きそうだった。「橋幸夫から返事をもらったけれど、一回目の返事と、二回目の返事では、筆跡が全然違う。まるで違う人が書いたようだ」と言うのです。手紙の内容は、季節の挨拶、そして次回の公演の案内にすぎなかった。それでも彼女は手紙を大切にしていた。大人になって、橋幸夫の事務所の人か、アルバイトの人が書いた手紙だと気がついた時、夢ははかなく消えただろう。

五十年後の今日、テレビで橋幸夫が『いつでも夢を』を歌った。「♪星よりひそかに 雨よりやさしく あの娘は いつも歌っている 声がきこえる 淋しい胸に 涙に濡れたこの胸に 言っているいる お持ちなさいな いつでも夢を いつでも夢を」手拍子をしながら一緒に歌った。テレビに向かって大きな拍手を送った。ファンレターの彼女も、一緒に歌っただろうか。

「今日は、「NHK歌謡コンサート」で橋幸夫が『いつでも夢を』を歌ったのよ。とても良かったわ」と夫に言うと、夫はつまらない事を言った。「橋幸夫が一人で歌ったの？ 吉永小百合は歌わなかったのか」と。日本を代表する反戦女優となった吉永小百合が橋幸夫と歌うわけがない。

長い時間の流れがそうさせた。

橋幸夫は平成二十七年（二〇一五年）、デビュー五十五周年になる。NHK『スタジオパークから こんにちは』に出演した。「いつも、若々しい歌声ですが、何かされていますか」との質問に「発声練習など特別何もしていません。声帯は筋肉でしょう。年齢で筋肉は弱って来るものです。歌うには足の筋肉も大切ですね。その辺は、気を付けています」と言った。当然だが、高齢になっても持つて生まれた良い声の人が長く歌い続けている。人気とは関係なく声が出なくなり引退する人は多い。

下手な字

ある日、親戚で葬儀があった。本葬までに三日もあったので、職場の人や友人知人に連絡の葉書を出すことになった。私は、面と向かってはつきりと「キミ、君は字が下手だから手伝わなくていいです」と断られた。親戚の三、四人の人で夜遅くまで葉書の宛名書きが続いた。

普通、字の下手な人には、面と向かって下手とは言わない。「汚い字ですね」「子どものような字ですね」「ザツな字ですね」「大きさがそろっていない」とは言わない。私に向かつて言った人は非常識です。相手の事を考えていない。私は下を向いたまま「そうですか」と言った。悲しいことでした。

ある日、幼稚園で配布された冊子を手にして驚いた。役員さんたちの手書きだった。私の文も掲載されていたが、私より下手な字だった。これでは、見ようによっては、この下手な字を私が

書いた事になってしまふ。当時、すでにパソコンの時代で、名簿や電話網はパソコンで作られていた。手作りという言葉は、陶芸でよく使われる。手作りの良さとは、世界に一つだけの貴重な物に贈る言葉にしたい。たった一度、幼稚園で配布されたその冊子は、手作りでしたが「味わい深い物」ではなかった。

無味乾燥な文

コピーライターの糸井重里さんが言った。「役所から送られて来る文書、たとえば税金に関する文は、全く無味乾燥です。あれはあれでいいのよ。僕はね、あれが例えば優れた詩人の書いた詩的な文だとしたら、いやだね。無味乾燥な文だからいいんだよ」。すると、聞いていた俳優の中井貴一さんが、「わかるなあ、そうだよね。韻をふんでいたりしたら。こりやおかしい。糸井さんって、そんな事を、いつも考えて生活しているんですか」と言って笑った。しまいには、笑いすぎで涙を流すほどの受けようだった。

糸井さんは、自分が作ったジャムでテレビ番組を作ることができる。ジャム一瓶で楽しい番組を作ることができるのは、この人だけです。糸井さんの会社にはスタッフが大勢いる。新企画のたびに新しいスタッフを募集する。オーディションには千人を超える人が殺到する。ここからは企業秘密だそうです。これからも活躍を期待したい。

詩を書かない理由

山形県酒田市出身の詩人・吉野弘の『虹の足』に出会った時、「この詩は素晴らしい。もう詩は書けない」と思った。大勢の人が今まで虹を見て感動したのに、「虹の足」という表現は、だれも思いつかなかった。最近、国語の授業で教材に使われていることを知った。

ある日、玄関に宗教を伝道する女性が立った。『虹の足』の話をした。

「虹は、遠くにいる人には美しく見えます。その下に住んでいる人は、当然幸せの人々に思えます。でも、虹の下に住んでいる人には、虹は見えなくて幸せであることがわかっていません」。すると女性は「何かの宗教に入っているのですか」と言った。あれほど感動した詩が、突然つまらない詩になった。女性と話した時間が、もったいなかった。二度と来ないでほしいと祈った。

虹の足

吉野弘

雨があがつて

雲間から

乾麵かんめんみたいに真直な

陽射しがたくさん地上に刺さり

行手に榛名山はるなまが見えたころ

山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。

眼下にひろがる田圃たんぼの上に

虹にじがそつと足を下ろしたのを！

野面のづらにすらりと足を置いて

虹のアーチが軽やかに

すつくと空に立ったのを！

その虹の足の底に

小さな村といくつかの家が

すつぱり抱かれて染められていたのだ。

それなのに

家から飛び出して虹の足にさわろうとする人影は見えない。

——おい、君の家が虹の中にあるぞオ

乗客たちは頬ほほを火照ほてらせ

野面に立った虹の足に見とれた。

多分、あれはバスの中の僕らには見えて

村の人々には見えないのだ。

そんなこともあるのだろうか

他人には見えて

自分には見えない幸福の中で
格別驚きもせず

幸福に生きていることが――。

話す

私は玉川学園の中学部で三年間を過ごした。小原國芳学園長の話は長かったが、繰り返される話は体験談であったため、力がこもっていた。

「貧しかったので中学に行くことができなかつた。官費の電信学校に入学できた。十三歳から十八歳まで海底電信局に勤めた。丁度、日露戦争が始まって暗号電報係になり、そこで英語を習得した。道を歩きながらも繰り返し英語を唱えて覚えた。英語は、すでに師範の卒業程度の力を得ていたのに、鹿児島師範学校では、*Trig & dog*から習わなければならなかつた。超級はなかつた。一方、訓育は軍隊式。道徳教育、特に社会訓令、教育の本質など、そろそろ疑問を持ち、教育はこれでよいのかと考えはじめた」と。

どのような境遇にあつても学ぼうとすれば、いくらでも道は開けるといふ話です。翌月の朝礼でも、また青年時代の話になつた。すると、私の近くにいた数学の先生と体育の先生の会話が聞こえた。

「また同じ話だ。この話は前にも聞いた事がある」「同じ話ができるのは、本当の事だからだ」と。

それを聞いた私は、「なるほど」と思った。繰り返し同じ話ができるのは、ウソでない証です。

読む

読む事は、書く事に通じている。読む力のない人は書く力もない。

朗読の極意

小学校の国語の時間に、とつとつと読んでいる児童に、先生が言われた。

「点とマルをしつかり休んで読むように。たとえば『べんけいがな、ぎなたをふりかざし』ではだめで、『べんけいが、なぎなたをふりかざし』だ。いいか、わかったか」と。児童らは「ハイ」と言ったものの、全然理解していなかった。私は、「弁慶が突然出て来て、どうしたの」と思った。しかし、大人になってから、うまい指導だったなあと思った。なぜなら、今でも覚えているからだ。この話を私から聞いた夫が、とんでもない事を言った。「同じような事で、『きんた、まけるな』というのがありますね。切る所を間違えると大変な事になります」と。私は復唱して泣きそうになった。「それって、やめていただきたい」「知らなかったの」「うん」。

先日、朗読CD全十六巻『聞いて楽しむ日本の名作』を買った。市原悦子が『蜘蛛の糸』を、寺田実が『一握の砂』を、林隆三が『耳無芳一の話』を、いとも簡単にスラスラ読むのを聴いて、すごいなあと思った。さすがだ。

中学校の時、壇ノ浦の合戦、那須与一が平家方の船上の扇の的を射抜くシーンの暗唱が課題となった。私は、内容が気がかりで、なかなか覚えられなかった。クラスのみんなが次々合格をもらう中、私は最後まで覚えられなかった。覚えたと思つた文を、口に出すと自分で創作した違う文になつてしまふのだつた。

夫が言つた。「僕は小学校で長い台詞を言う役を任された。演技力はなかつたけれど。本を読むのは速くて、読む速さの競争があつて、読み終えて手を上げたら、先生が驚いて内容を言わされたことがある。新学期に、新しい教科書をもらうと、一挙にぜんぶ読んだ。学校から帰ると、母親が、今日学校で習つた所を聞かせてほしいと言うので、母親の前で毎日のように教科書を読んだ。繰り返し読む事で勉強になつた」と。昔から「読み書きソロバン」とは、よく言つたものです。